

最後の十年

日本経済 の構想

Towards the Twenty-first Century—
A Vision for the Japanese Economy

田中直毅

Naoki Tanaka



112
D202
955

S
112
FT11

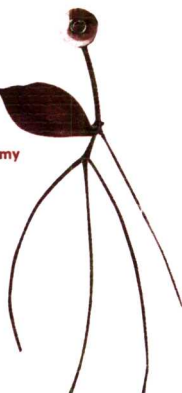
最後の十年

日本経済 の構想

Towards the Twenty-first Century —
A Vision for the Japanese Economy

田中直毅

Naoki Tanaka



FB

日本経済新聞社

1993, 4, 1 Q.

〔著者略歴〕

田中 直毅 (たなか・なおき)

1945年愛知県生まれ。東京大学法学部卒業。

東京大学大学院経済学研究科修士課程修了。

国民経済研究協会主任研究員を経て、

1984年より本格的に評論活動を始め、現在に至る。

〔主要著訳書〕

『軍拡の不経済学』(朝日新聞社, 1982年), 『手ざわりのメディアを求めて——消費社会の現在』(毎日新聞社, 1986), 『グローバル・エコノミー』(日本放送出版協会, 1988), 『日米経済摩擦』(日本放送出版協会, 1989), 『日本のヴィジョン』(講談社, 1990), 『市場の解』(中央公論社, 1991), 『ベレストロイカ』(訳, 講談社, 1987)

最後の十年 日本経済の構想

1992年5月22日

1版1刷

1992年10月12日

14刷

著 者 田 中 直 毅

© Naoki Tanaka 1992

発行者 田 村 祥 藏

発行所 日本経済新聞社

〒100-66 東京都千代田区大手町1-9-5

電話 (03) 3270-0251 振替 東京3-555

広研印刷/大口製本 ISBN 4-532-14101-X

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

Printed in Japan

アメリカ豊かなる没落

佐藤隆三著 豊かさを貪りすぎて衰退への道を歩むアメリカ！ パートタイム・アメリカンと皮肉られる著者が、エピソードを交えて説き明かす「わがままなアメリカ」と「ずるい日本」の実像。 定価一、〇三〇円

新しい世界 新しい経済

文明と経済の興亡

斎藤精一郎著 戦後世界をリードしてきた米国は後退し、日本の技術・情報経済が世界の成長を引っ張る時代がやってくる。 来世紀の世界秩序を今世紀の歴史を踏まえて展望した超話題作。 定価二、〇〇〇円

日米摩擦の経済学

竹中平蔵著 日米摩擦はなぜ生じ、なぜ激しさをます一方なのか。摩擦の本質を経済の論理、政治の論理から厳密に分析し、日米が取るべき針路、方策を大胆に提言する。 定価二、〇〇〇円

お近くの書店でお求めください。

入門・世界の民族問題

山内昌之／民族問題研究会　バルト三国独立問題、クルド人弾圧など、燃えさかる民族問題が世界秩序を変えようとしている！　本書は世界中の民族問題を各地域の専門家がやさしく解説。データ、地図を豊富に用いた民族問題総まとめ。

定価 1,300 円

中国の実験

エズラ・F・ヴォーゲル著／中島嶺雄監訳　現代化を模索する中国で常に一歩先を歩んできた広東は、香港、台湾経済の強い影響下で改革・開放のモデルとなってきた。十年にわたり現地調査を重ねた成果を踏まえ、中国における改革の実態を歴史的経緯をおさえつつ重層的に描き出す。

定価 2,900 円

検証 ソ連・東欧の経済改革

伴 拓郎／日本興業銀行調査部編　ソ連・東欧諸国の経済改革は、もはや後戻りできない段階にまで進んでいる！　本書は計画経済の功罪や改革の成否を問うだけでなく、民営化・合併事業の実態、コメコン崩壊後の経済的枠組みなど改革から生じるあらゆる問題を豊富なデータに基づいて検証する。

定価 1,500 円

定価は消費税込みです。お近くの書店でお求めください。

アメリカを見くだすな

RUST TO RICHES

●日米経済の盛衰は逆転する

J・ラトレッジ、D・アレン著／石塚雅彦訳 二一世紀に向け、強大な産業国家として復興するアメリカ、繁栄から一転して凋落へと向かう日本――。堅実な論理を用いながら二大国の未来像を大胆に予想した、読み応え十分の書。定価1,500円

Yes or No?

●買われる米国・買う日本

N・J・グリックマン、D・P・ウッドワード著／叶芳和監訳 日本の直接投資を非難する米政治経済界首脳、歓迎する地方都市。米国の本音はどこにあるかを綿密な調査と事例によって明らかにする。定価2,500円

誰がケインズを殺したか

W・カール・ビブ著／斎藤精一郎訳 かつて栄華を誇ったケインズ経済学の「死亡」が宣せられてからおよそ10年。だが、ケインズは本当に死んだのか？ 多彩な登場人物を絡めて経済学派の熾烈な覇権争いをミステリータッチで描く。定価1,500円

定価は税込みです。お近くの書店でお求めください。

最後の十年 日本経済の構想*目次

プロローグ——世界史を分ける「最後の十年」

9

一章 日本経済——強さの岩盤

19

一変した世界の日本経済への視線

20

「新しい日本経済」の誕生

32

持続する日本企業のダイナミズム

44

革新的な経営システムの模索

52

日本経済の内なるマグマ

58

二章 バブル崩壊後の日本経済

61

「バブル経済」の顛末

62

マーケットに撃たれたバブル

71

見失われた日本経済のディシプリン

77

バブル清算の帰結

82

避けられない金融の再編成

88

日本経済の力強さは衰えない

100

三 章

世界最強の通貨になる円

マネタリー・ディシプリンの確立

108

経済に規律を与える通貨の安定

116

日本社会の多元化・成熟化とディシプリン

126

新しい競争モデルの構築

133

日本の金融に真の革新が起こる

138

風格ある生活大国への道

142

証券不況からの脱出は市場に委ねよ

147

日本が牽引するアジア競争モデル

150

四 章

迫られる政府部門の再構築

予算編成をめぐる混乱

155

「霞が関」は本当に必要か

160

衰弱する公共意識

167

必要な新しい国家論

173

麻痺する国家の機能

177

153

107

市場介入行政の終焉

185

五章 内向きの時代に入る米国

191

疲労感が際立つ米国経済

192

国内問題でつまづいたブッシュ

201

自画像を描き直し始めた米国

207

“Kマート・エコノミー”の蹉跌

213

グローバリズムの退潮

219

六章 幻想の欧州統合

227

弱まる統合へのモメンタム

228

旧ソ連解体劇の真相

235

絶望的な旧ソ連経済の立て直し

244

ECリージョナリズムの限界

248

七章 勃興するアジア経済ネットワーク

261

共産主義はアジアでも死滅するか

262

踊り場のNIES経済

274

アジア「共通市場」の可能性

278

アジア・ネットワークが日本を変える

284

八章 米国・欧州・アジア—世界の三極と日本

293

自らを世界に語れない日本

294

二十世紀末の焦点—アジアをめぐる日米関係

298

「世界精神」を体現するアジア

307

歴史の清算に手間取る欧州

313

相次ぐアジアの局地経済圏構想

318

日本の政治・経済が左右するアジアの将来

323

九章 漂流する世界秩序

329

新秩序形成への「最後の十年」

330

十章 日本 of 構想力

問われる日本の新秩序構想力	338
半世紀前の米国の教訓	342
ウルグアイ・ラウンドの本質	346
IMF・世銀型処方箋の限界	354
パワーの空白を埋められるか	358
二十世紀の歴史的帰結	365
巨大債権国の興亡	372
構想力をそぐ官庁間政治	377
憂うべき政治の衰弱	382
地域安全保障とコメの自由化	386
教育・研究環境の改革	389
日本の構想力を鍛え上げる条件	396

あとがき

401

最後の十年 日本経済の構想

装幀 川上成夫
装画 酒井賢司

プロローグ——世界史を分ける「最後の十年」

日本経済の未来は明るい

日本経済の動向について、一九九一年の終わりがから九二年に入る時分になって急速に悲観論が高まってきました。株価の不振がきっかけだったと思いますが、日本を代表するハイテク企業が大幅な減益決算になることが明らかになった九二年二月以降はとくに、日本経済の先行きを不安視する議論が目立つようになりました。循環的な要因による景気の後退という見方のほかに、日本経済が戦後初めて「成長の壁」に直面している、といった悲観的な議論も出てくるようになりました。私の日本経済についての評価は、こうした悲観論とは異なっています。製造業を中心とした日本の企業は、西暦二〇〇〇年時点での自画像を描き、それに向けての挑戦を開始しています。投資比率を高めるといふ事実もありましたし、これまで完成を急いだ企業内のシステムを一挙に変換しようという試みさえ開始したところもあります。日本企業は現状を調整や変革の対象として描き出す努力のなかで、明日をつかもうとしているのです。

こうした模索を世界的にみても、もつとも真剣に開始した日本の企業の将来が暗いわけがありません。しかし、そうはいっても、一九八〇年代後半のいわゆるバブルの膨張は、日本経済の歩みを相当に歪めた面があります。

本書は、一方でバブルの解消を急ぎつつも、世界が激変するなかで日本経済がどのような位置に立とうとしているのか、私なりの構想を取りまとめたものです。西暦二〇〇〇年に至る日本経済がどのような課題を抱え、それをどのように克服しようとしているのかについて、粗削りではありますが、焦点を絞った私なりの判断を書き連ねました。

足枷となる公共意識の衰え

ところで、日本経済の構想を描こうとして改めて気づいたのは、政治、公共政策に代表される集合的意思決定の分野における立ち遅れです。民間企業に代表される私的領域においては、自画像やディシプリン（規律）の確立を見通すことができても、国家にかかわる枠組みとなると、問題への接近の手法をめぐってさえ、容易に合意をつくり出すことができないのが現状です。

第二次大戦後の安定した国際社会の枠組みが大きな変容を遂げることが確実となり、しかも日本が世界の秩序化に向けて相当に大きな役割を果たさなければならぬとき、わが国における公共意識の衰微は、あまりにも重い足枷となっています。このことは、多少とも国際社会を展望すれば容易にわかることです。

座標軸を失った世界

たとえば、旧ソ連に独立国家共同体（コモンウェルス）が取って替わることになりましたが、このことがどれほどの衝撃力を秘めているのか、実のところ誰にもわかっていないのではないのでしょうか。東西対立という座標軸が消滅したあとに、いかなる基軸が登場するのか、という問題がまずあります。

東欧、旧ソ連における共産主義体制の崩壊とともに、確かに民主主義と市場経済とが世界をおおう、という図式が成立しました。しかし同時に、「人権」と「政治枠組みの安定性」とをバランス感覚のなかでとらえるべきだ、という主張を東南アジア諸国のリーダーが正面切って行うようになりました。いわばアジア型民主主義の主張です。中国であれミャンマーであれ、また東南アジア各国の権威主義的開発政治であれ、「安定性」についての現実的要請をどうとらえるべきか、という問題をわれわれは提示されているといえましょう。

また、市場経済についても、どうやら中身はいろいろだということになり始めました。自由化、民営化は一九八〇年代以降世界の潮流になり、それが旧共産圏までをもおおいつけたのですが、資本主義の中核であるはずの米国や日本では、金融面でのバブル現象の発生が避けられませんでした。そして米国でもまた日本でも、経済社会のあり様をめぐり改めて自画像の点検過程に入り始めています。市場経済にも、相当たくさんの型があることが明らかになってきており、これがひとつの型に収斂しつつあるとみるべきなのかどうか。ひと筋縄ではいきそうにありません。